

スポーツツーリズムへの挑戦を機に桃源郷のまちが目指す 持続可能な 市民幸福度向上への道

徳島県三好市長

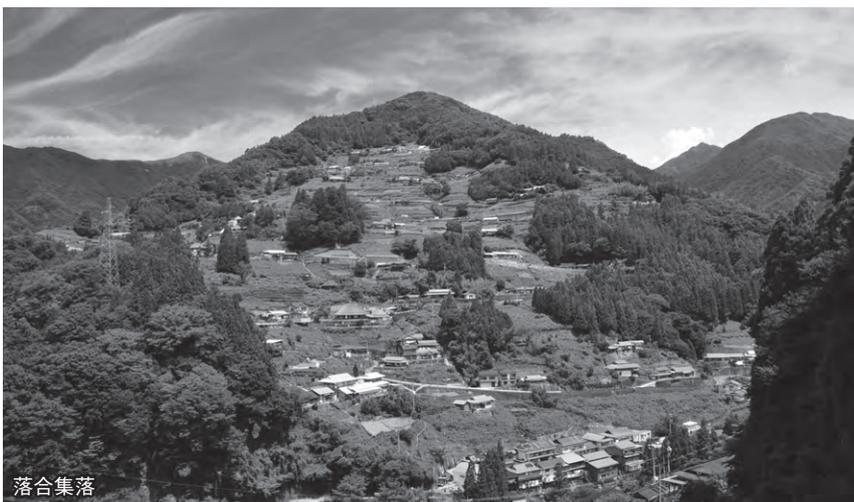
高井 美穂



たかい・みほ

1971年、徳島県三野町（現三好市）生まれ。徳島県立脇町高等学校を経て、早稲田大学第一文学部文学科英文学専修卒業。1994年（株）ダイエー入社、社長室秘書部配属。2003年衆議院議員選に初当選、3期務める。在任中に文部科学大臣政務官、文部科学副大臣等を歴任。2015年徳島県議会議員に当選、2期務める。2021年三好市長選挙に当選、2025年再選。

四国三郎・吉野川の上流域に位置する徳島県三好市。険しい自然環境はこれまで過疎の要因となってきたが、2010年代にウォータースポーツの世界選手権大会が開催されたことを機に市は「スポーツのまちづくり」へと乗り出し、さらに自然や文化のポテンシャルを生かした滞留型の「スポーツツーリズム」へと舵を切って注目を集めている。だが、経済的豊かさの追求とは一線を画し、今日に脈々とつながれてきた山間の暮らしに立脚した持続可能性を目指そうとする同市の高井美穂市長を訪ねた。



落合集落

三好市の概要

三好市は2006年3月、徳島県三野町・池田町・山城町・井川町・西祖谷山村・東祖谷山村が合併して誕生。四国のほぼ中央に位置し、古くから交通の要衝として、また県西部の社会、経済、文化、観光の中心地として発展してきた。自然景観に恵まれ、大歩危峡や黒沢湿原、紅葉の名所・竜ヶ岳、西日本第2の高峰・剣山等があり、四国霊場第66番札所・雲辺寺や平家落人伝説の残る祖谷のかずら橋など歴史的文化遺産も多数ある。

「秘境」「桃源郷」と呼ばれた山間のまちに世界のスポーツ界が注目

——最初に三好市の概要についてお教えてください。

高井 三好市は、2006年に4町2村の合併により誕生しました。徳島県の西端、四国のほぼ中央に位置し、北は香川県、西は愛媛県、南は高知県に接しています。四国最大の面積を誇り、その9割が山と川からなる自然に恵まれたまちで、「秘境」と呼ばれる山間地の美しい大地に約2万2,000人が暮らしています。四国三郎の異名を持つ大河・吉野川や西日本第2の高峰である剣山、祖谷のかずら橋といった豊かな観光資源を有し、四季折々の独特な風景は日本でも屈指の美しい景観を形成しています。

三好市には自然景観だけでなく、見どころも多くあります。四国酒まつり、いけだ阿波おどり、にし阿波の花火大会、三好くるまつりといった4大イベントに加え、各地域で住民主導の様々なイベントや祭りが行われています。また、大歩危・小歩危のラフティングやイケダ湖でのサップ・カヌー、ジップラインやフォレストアドベンチャー、剣山登山など、観光・スポーツのまちとして多くの人が訪れ、賑わっています。

一方で山がちな土地ですから、長い時間をかけて独自の農耕文化が培われてきました。それが2018年に国連食糧農業機関（FAO）から世界農業遺産に認定された三好市を含む「にし阿波の傾斜地農耕システム」です。急峻な傾斜地をそのまま利用して農耕生活を営むことで自然と集落を

守ってきた歴史は、まさに現代につながるSDGsの理念そのものと言えます。こうした暮らしに注目したアメリカの東洋文化研究者アレックス・カーは、ここには古き良き日本が残っていて、雑穀や豆腐、干し芋や干し柿等の伝統的な食文化が豊富にあると賞賛し、この地域を「桃源郷」と呼んだほどでした。

——その三好市に生まれた高井市長が衆院議員から徳島県議、三好市長へと、より出自に近いところに活躍の場を求めてきた理由は。

高井 私はバブル崩壊後に東京で社会人生活を始めましたが、次第に仕事や自分の生き方に行き詰まりを感じるようになり、休職して米国留学をするなどしていました。そうしたなかで、自分が住みやすいと思える社会にできるよう自分が努力すべきだと思い至り、衆議院選挙で女性候補者の公募に応募したことが政治に関わるきっかけとなりました。不満があるなら、文句を言うより自分で変えようと考えたのです。

計3期務めた衆院議員時代には、文科省の政務官や副大臣になって高等学校授業料の無償化を実現するなど得難い経験をしました。その後、国政からは身を引いたのですが、地元で県議や市長にと求められ、自分が生まれ育ち、好きだと思える場所で再び政治に関わろうと考えました。政治の世界で得た恩と経験は、政治の世界で生かさなければと地元に戻ったのです。もっとも、選ばなければ政治の仕事はできませんので、住民の皆さんから負託をいただいてありがたいと思いますし、今、市長として仕事をしながら、首長職は自分で決めて実行したことに責任を持って、とてもやりがいがあると感じています。

スポーツまちづくりで「スポまち！長官表彰」を受賞

——ところで、2021年の市長就任時に、三好市は「アウトドアスポーツのまちづくり」を推進していました。ご自身はその方向性をどう見ていましたか。

高井 三好市の魅力はよく知られたかずら橋だけではありません。自然体験とスポーツは私自身が幼いころからの日常生活に組み込まれていて、成長を促してくれた原体験ともいべき素晴らしい



「にし阿波の傾斜地農耕システム」を活用したやつまたほ場



ラフティング世界選手権2017



ウェイクボード世界選手権大会2018

ものでした。世界が三好市の自然環境に注目し、2017年に「ラフティング世界選手権」、2018年には「ウェイクボード世界選手権大会」が開催されたことで、ウォータースポーツの一大拠点であるというイメージが一気に高まりました。世界から20,000人を超える競技者や観客がやってきたのです。この2つの世界選手権のレガシーは映像などは別として形に残るものはありませんが、キャンプやアウトドアの観光客の誘客に貢献してくれるとともに、あらためて豊かな自然環境が評価されたことで、市民にとってはシビックプライドの醸成につながりました。

そのころ私は徳島県議としてスポーツ行政の関係から誘致等にも関わっていましたが、実はラフティング世界大会の際は地元のユースチームを結成し、その一員に自分の娘が入ったことで、公私ともにどっぷりその魅力にはまってもいたのです。また、訪れた人々は水環境の良さだけでなく、自然の美しさ、地元のホスピタリティなども高く評価してくれて、とても嬉しかったことを覚えています。

——その後は市長として「Hessokko水あそびパーク」をオープンさせるなど、市民ぐるみのスポーツ振興を図りました。

高井 ウォータースポーツの盛り上がりを継続させようと、2022年に開設したHessokko水あそびパークですが、観光客や市民の皆さん、特に川で遊ぶことがなくなった子どもたちが川に親しみながらウォータースポーツの楽しさを体験してもらうことで泳ぎを覚えたり、自然の偉大さを身体で感じて、感動してもらいたいと思ってつくったのです。

というのも、今は全国で水の事故があったり、

暑さのあまりプールで遊べなかったりという状況が続いていて、泳ぐ機会も少なくなりつつあるのが現実です。川と親しむ経験を持たないまま子どもたちが大きくなるのは残念ですし、もっと言えば自然の怖さを学ぶ機会を持つことも大事なことだと思います。

水あそびパークの場所は市内のイケダ湖にありますが、サップ、カヌー、ラフティング、ウォーターロール等のアクティビティも用意されていますから、子どもたちもきっと水が好きになると思います。プールにはいない生き物もたくさんいますからね。

——そうした三好市のスポーツまちづくりは全国的に注目され、2022年11月にスポーツ庁の「スポまち！長官表彰」を受賞しました。

高井 地域の人たちが大事に守ってきた自然や景観のなかで行われるスポーツが国から評価してもらえたことは、その環境を守ってきた住民が素晴らしいという評価をいただいたのと同じことで、とても嬉しい出来事でした。三好市は昔から地元にあるものを大事にして、自然とともに生きてきた地域です。なにかをつくって人を呼ぶのではなく、持っているものを生かして助け合いながら生



「スポまち！長官表彰2022」表彰式

きてきたまちですから、やっと時代が三好に追いついてきたと感じました。

スポーツツーリズムで図る観光立市への飛躍

——その後も三好市は「アウトドアスポーツのまちづくり」から「スポーツツーリズムのまちづくり」へと取組みを進化させています。

高井 「スポーツツーリズム」とは、その地域で開催されるスポーツ（大会、競技会等）を観戦する（見る）、参加する（行う）、支援する（ボランティア等で支える）ことなどを目的とした旅行スタイルですが、地元にとってはスポーツの魅力で人を呼び、滞在していただくことによって地域活性化を目指すものだと考えています。

三好市は豊かな観光・文化資源に恵まれていることから、その地域資源をもっと深く楽しんでほしいということです。せっかくスポーツを見に来て楽しんだのなら、併せてその土地の魅力も存分に楽しんで帰ってほしいのです。吉野川だけでなく、剣山や三嶺もあり、登山やトレッキングも人気の地域ですが、人と自然の共存はそこに入ってこそ知ることができる恵みがあります。つまり、アウトドアスポーツの振興を図ることは、三好市にとっては地域の特性を生かした持続可能なまちづくりだといえます。

——さらに2023年に「世界の持続可能な観光地TOP100選」に選出されて追い風が吹くなか、「第3次観光基本計画」（2025年）では観光を市のリーディング産業と位置付けました。

高井 世界の持続可能な観光地とは「訪問客、産業、環境、受け入れ地域の需要に適合しつつ、現在と未来の環境、社会文化、経済への影響に十分配慮した観光」を意味していますが、国際認証団体（GD）がそのTOP100を選定したなか三好市も入れていただきました。これをきっかけに、「第3次観光基本計画」の検討過程においては観光客のデータ分析をしっかりと行って浮き彫りになった課題を整理し、今後5年間で目指すべき観光地としての姿をイメージしながら、多面的なアプローチを着実に遂行することに主眼を置いて策定しました。

ただ、正直に言えば、三好市の観光地は「秘

境」であり、大都市圏からは遠く、宿泊施設も少ないのです。道路も駐車場も狭いことから客数を大きく増やすことは難しいのが現実です。今、全国ではコロナ後のインバウンドが好調ななか、有名観光地はオーバーツーリズムの課題に直面して苦労されていますが、ここではキャパシティを超えるとたちどころに住民生活に大きな影響が出てしまうのです。

ですから、私たちはいたずらに入込客数や経済効果の数値目標を追うのではなく、わざわざここに来て良かった、ここにしかないものが見られた、ここならではの体験ができたという、来訪者の心を満たすことに重点を置いています。したがって、毎年の進捗を確認する調査では、「来訪者の総合満足度」（たいへん満足）と「再来訪意向」（たいへんそう思う）の最高評価の底上げと一人当たり旅行消費額の引き上げを成果目標にしているのです。

3本の柱で持続可能な三好市の未来を描く

——一方、高井市長は昨年「災害に備える」等、3つのまちづくりの方向を示して再選を果たしました。

高井 2期目に向けたまちづくりの方向ですが、まず「災害に備えるまちづくり」としては、撤退した船井電機の跡地を隣接する池田総合体育館と連動させて防災拠点としての機能を持たせることで、防災・減災対策を強化します。併せて防災井戸や防災倉庫の整備にも取り組み、中学校体育館の空調設備に着手することで学びの環境を向上させるとともに、災害時の避難所としての環境改善も図ります。

それから「過疎に負けないまちづくり」ですが、広い市域全体で乗合タクシーの導入を進め、市民の利便性向上を図っていきます。また、市有管理施設の適正管理に向けては売却や譲渡の検討を進め、廃校の利活用やサテライトオフィスの進出等の有効利用を促進していきます。さらに、ジオパークと世界農業遺産を活用したシビックプライドの醸成や、地域文化と景観の継承、豊かな地域資源を活用したカーボンクレジットの創出やふるさと納税の増加につながる高付加価値な特産品の

開発も進めています。

最後の「子どもたちに確かな未来をつなぐまちづくり」では、船井電機跡地に多目的ホール・図書館・市民活動施設を整備します。ここは防災拠点であるとともに、子どもや市民の文化活動等の拠点ともなり、日常生活の語らいや寛ぎの居場所としても機能してくれるものと期待しています。また、旧池田町内の教育・保育施設も再編整備を進めていき、池田小学校を建て替えるとともに、子どもたちの学びの環境を整えるために給食の無償化や0～2歳児の保育料無償化も継続します。

——三好市は昨年「地域みらい創発センター」(ミライケ)を設置しましたが、さらなる教育・コミュニティ機能の充実・確保策を打ち出しているのですね。

高井 ミライケは徳島県と三好市が連携し、県立高校寮と市民活動機能や図書スペースを同一施設の中に併設したものです。まち全体の居間のように誰もが気軽に使える空間で、多くの世代の人が「生活の場」「集いの場」「学びの場」として利用できる施設のあり方を目指しています。というのも、全国で同じ状況だったと思いますが、コロナ禍では市民が集まってコミュニケーションをとる機会を失い、コミュニティ活動が低下してしまいました。また、出版不況で市内から書店がなく

なってしまったこともあり、図書館の充実も欠かせない課題でした。そうした意味で複合的な目的を持つ公共施設の整備は不可欠でしたし、今回の船井電機跡地の施設もミライケと並んで期待する役割を担ってくれることを願っています。

そして、学びに関連して強調したいのが多様な人材育成事業です。森林環境譲与税を活用した「三好林業アカデミー」では、高性能林業機器を駆使して施業訓練できることで11種類もの資格を取得できますから、未来の三好の森林を支える林業人材が育ちつつあります。また日本ジオパークに認定された三好ジオパークでは、「三好ジオ暮らし方カレッジ」が開講されていて専門員を育てたり、市民の皆さんも三好の地質や自然を学んで防災等の知識を深めたりしています。さらに、昨年開校した通信制みのり高等学校では、山のなかの落ち着いた環境のなかで不登校の子どもたちが学び始めるなど学びの多様化も進められていますし、民間事業者と連携するデジタル人材育成事業では、四国大学の協力を得ながらウェブデザイナーになりたい若者や3Dプリンターでものをつくる若者、eスポーツを極めようとする若者たちが学び始めています。

——とはいえ、昨年の「三好市財政計画」は今後の6年間で累計54億円の赤字が見込まれると



ミライケのオープンスペース。ソファ席とカウンター席、書架や電動スクリーンも備えた多目的スペース



三好林業アカデミーでの植栽実習



三好ジオ暮らし方カレッジでの実験

公表するなど、厳しい財政運営を迫られそうです。高井 現状の三好市財政には確かな財政調整基金があり、大きな破綻リスクを抱えている状況にはありません。ただ、もとより財政構造は脆弱で、今後を見据えると厳しさは否めないのも事実です。そこで、市税等の徴収率向上やふるさと納税の強化、公有財産の売却等で歳入の確保策を図って自主財源を拡充するとともに、ICTを活用した事務の効率化や組織の見直しによる経費の削減も追求していきます。

一方で、三好市らしい新たな取組みにも挑戦していきます。豊かな森林資源を生かしたCO₂吸収源としてのカーボンクレジットに取り組んでいて、収入を得ていく準備が整いつつあります。従来型のJクレジットに加え、九州大学やヤマハ発動機と包括連携協定（「森を繋ぐ協定」）を結ぶことで、「ボランティアクレジット」という全国の自治体でも数少ない仕組みに挑戦しています。ボランティアクレジットとは民間セクターが主導してCO₂排出削減を売買するもので、ドローンを飛ばして森林や生態の正確な計測をしてCO₂吸収源としての価値を判定しますが、すでに森林計測も開始していることから、経済的価値も含めた今後の展開には大いに期待しているところです。

人口減少は必ずしも不幸ではない

——最後に伺いますが、高井市長は「人口減少は必ずしも不幸ではない」とメッセージを発信しておられます。その思いとは。

高井 私は社会の形は成熟度によって変化していくものだと考えています。日本は高度成長期からピークアウトして久しく、すでに人口も経済も拡大の時代から成熟して豊かに長く生きる時代へと移ったといえるでしょう。

ところが、人間の価値観は多様で、求める幸せのレベルも多様です。住民の求めるサービスの質と量がどんどん増えていくなかで、それらすべてに行政が応えていくことは財政的にも人的にも不可能ですから、やるべきことは問題を抱えている人に手を差し伸べて困りごとを減らしていくこと、人々の幸福度を上げるために不幸を減らしていくことになるのだと思います。

私は人が減ることを嘆くのではなく、人口が減少するなかでも、現在いる人々やこれから生まれてくる人々、訪問してくれる人々や移り住んでくれる人々など、三好市に関係を持ってくれる人々を大切に持続可能な地域にすることがもっとも大事だと考えています。地域では老若男女がそれぞれの立場でできることを果たし、互いに助け合い、支え合えば課題解決も図れると思います。なぜなら、長年、三好の人々は豊かで厳しい自然のなかをそうやって営々と暮らしてきましたし、その本質はこれからも変わらないと考えるからです。だから、人口減少は必ずしも不幸だ、たいへんだとは思えないのです。

——人口減少を楽観的にとらえると。

高井 考えてみてください。日本の長い歴史のなかで人口が爆発的に増えたのは戦後のことです。戦後の第1回人口会議（1974年）は「これから日本の人口は増えすぎてたいへんなことになる」と言っていますし、団塊ジュニア世代の私が若いころの日本は人口増加がまだ懸念されていました。つまり、短期的な傾向だけを見て、人が減ることは本当にいけないことなのですか、と私は問いたいのです。

この間、全国の多くの自治体は人口減少対策を求められ、医療・保育の負担軽減や無料化が進んだ結果、子育て支援はかなり万全になりつつあります。しかし、それでも出生率がなかなか戻らないのは、なぜなのでしょう。私はどれだけ社会が成熟しても「より幸せになりたい」という人々の気持ちだけは、ずっと残るのではないかと考えています。住民の幸福度を向上させる、そこが守られていけば、100年後には再び人口は増加するかもしれません。

自治体の役割は地域で暮らしていく市民の尊厳を守り、生活を支えていくための公共インフラを維持し、人が減っても自治が機能し続けるようにしていくことです。社会構造の変化に対応した対策を進めて、住民が安心して幸せに暮らせる環境づくりに力を尽くすことです。AIも含め、いろいろな科学や医療・介護の技術を駆使していけば、絶対乗り越えていけると思います。

地域に人の暮らしがある限り、自治体消滅を恐れる必要はないのではないのでしょうか。

——ありがとうございました。